

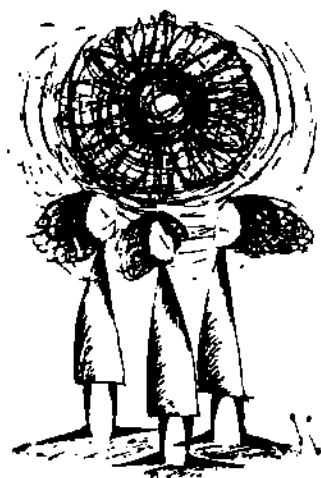
長崎の鐘

永井 隆 著



長崎の鐘

永井隆著



中央出版社

長 崎 の 鐘

定価 650円

昭和51年 6 月20日 第 1 刷発行 昭和61年 8 月 1 日 第14刷発行

著 者 永 井 隆

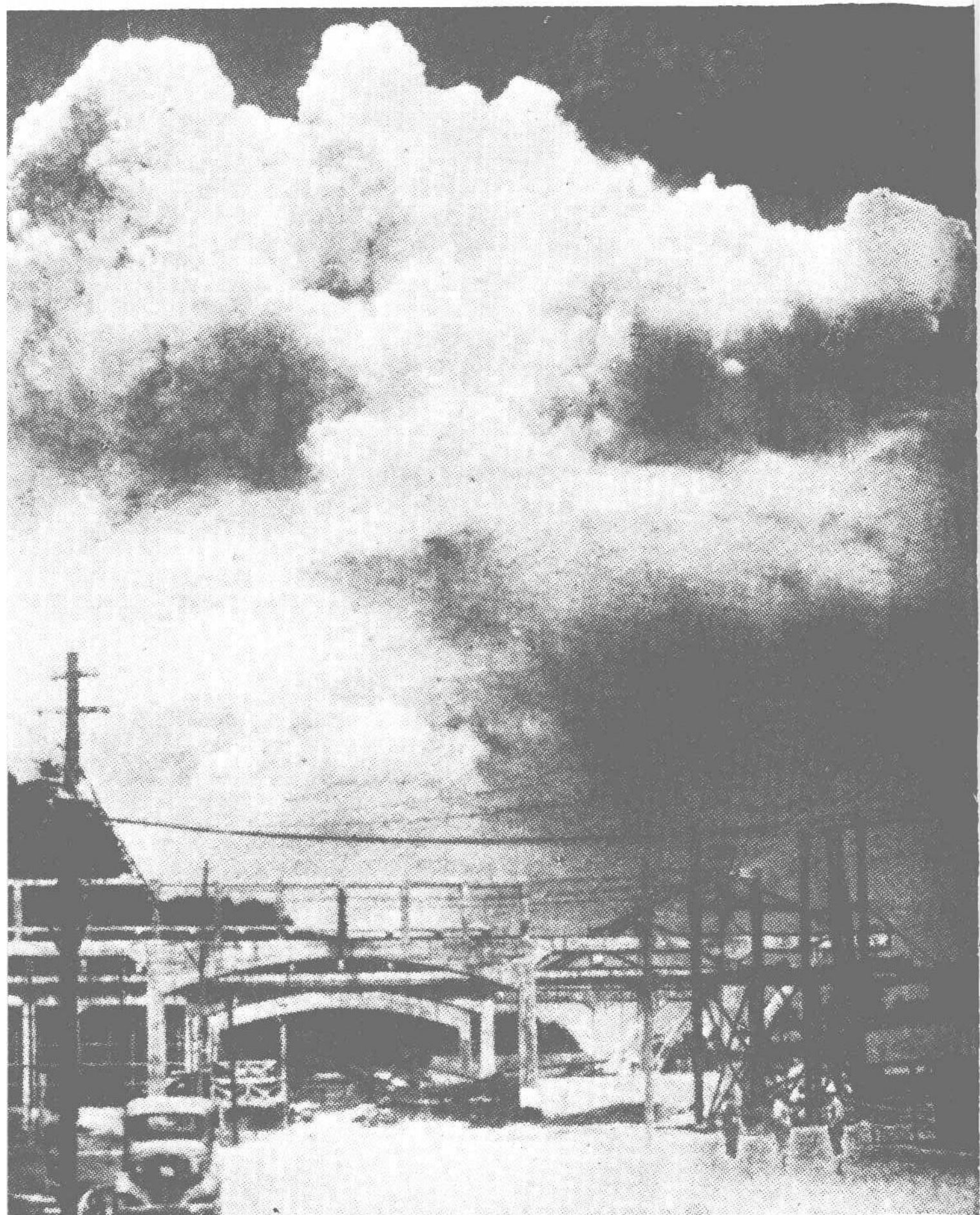
発行所 中 央 出 版 社

〒 160 東京都新宿区四谷 1 の 2
電 話 (03) 357-6401 (代表)
版 元 (03) 359-0451
FAX (03) 351-9534
振 替 東京 2-62233 番

印刷所 聖パウロ会 八王子修学院

(落丁・乱丁はおとりかえいたします)

ISBN4-8056-6401-0 C0295



原子雲——爆発五分後，長崎港外香焼島（約二里）にて撮影

王平安



後



序 文

純心女子短期大学副学長

片 岡 弥 吉

昭和二十年八月九日、原爆被災した長崎医科大学第十一医療隊隊長永井博士は、三日間の救護作業が一段落ついてから、全焼したわが家に帰って、緑夫人の遺骨を拾い、二児を疎開させていた三ツ山に行った。ここには多数の傷病者がいたので、第十一医療隊を再編成し救護に当たった後、九月二十五日、原爆で切られた右側頸動脈が再び切れて、白血病と不眠不休の救護活動の過労も加わって失神、危篤に陥る。奇跡的に回復すると、まず「第十一医療隊救護活動報告書」を書いて長崎医科大学に提出、つづいて書き始めたのが本書である。昭

和二十一年八月脱稿したが、占領軍司令部の発行差止めを受け、原稿はアメリカ国防総省に送られた。日本軍が行なった「マニラの悲劇」を付録としてつける条件で、ようやく公刊が許可され、昭和二十四年一月、日比谷出版社から発行されたのである（占領が解けてから「マニラの悲劇」は除いた）。

博士は自序の中で「現場のスケッチも、傷の写真も、解剖したことも、標本もないので、医学論文としての価値はないでしょう」「これは医者立場から見た、原子爆弾の実相をひらく知らせ、人びとに戦争をきらい、平和を守る心を起こさせるために書いたものです」と述べた。

原子物理学者、医科大学の放射線科部長であり、自ら被爆し、多数の被爆患者を治療した博士のこの本は、その後多く出されている「長崎の証言」の第一にあげられるべき「人類史上の大事件の生きた記録」であり、また、たくましい人間愛の物語でもある。欧米数か国語に訳されて、世界的反響を呼んだ。映画にもなり、歌謡曲もひろまっている。

『長崎の鐘』の書名は、浦上天主堂の聖鐘に由来する。かつて長崎医科大学学生だった博

士は、毎日この鐘がアンゼラスの時を告げるのを聞いて感銘を受け、カトリックへの関心を寄せ始めていた。

終戦後、被災地浦上で、焼けトタンの仮小屋に、虚脱した心で住む人びとの精神を奮い立たせ、生活再建と被災地復興の意欲をかり立てようとして天主堂の廃墟から聖鐘を捜し出し、杉丸太三本を組み合わせた急造鐘楼につり下げた。昭和二十年のクリスマスの夜のミサから、この鐘が再び鳴り始める。クリスマスは「平和」をもたらす日である。本書の題名にも博士の平和へのねがいがこめられている。

昭和五十一年二月

1 目 次

目 次

序 文	
一 その直前	3
二 原子爆弾	10
三 爆撃直後の情景	16
四 救 護	39
五 その 夜	59
六 原子爆弾の力	65
七 原子爆弾傷	81
八 三ツ山救護班	89

一 その直前

昭和二十年八月九日の太陽が、いつものとおり平凡に金比羅山から顔を出し、美しい浦上は、その最後の朝を迎えたのであった。川沿いの平地を埋める各種兵器工場の煙突は白煙を吐き、街道をはさむ商店街のいらかは紫の浪とつらなり、丘の住宅地は家族のまどいを知らず朝餉の煙を上げ、山腹の段々畑はよく茂った諸の上に露をかがやかせている。東洋一の天主堂では、白いベールをかむった信者の群が、人の世の罪を懺悔していた。

3 その直前

長崎医科大学は今日も八時からきちんと講義を始めた。国民義勇軍の命令の、かつ戦いかつ学ぶという方針のもとに、どの学級も研究室も病舎も、それぞれ専門の任務をもった医療救護隊に改編され、防空服に身を固め、救護材料を腰につけた職員、学徒が、講義に、研究

に、治療に従事しているのだった。いざという時にはすぐさま配置について空襲傷者の収容に当たることになっており、事実これまで何回もそうした経験がある。殊について一週間まえ大学が被爆した時など、学生には三名の即死、十数名の負傷者を出したけれども、学生、看護婦の勇敢な活動によって、入院外来患者には一人の犠牲者も出さなかったほどである。この大学はもう戦になれていた。

警戒警報が鳴りわたった。病院の大廊下へ講堂から学生の群が流れだし、幾組かのかたまりになってそれぞれの持場へ散っていった。本部伝令がいちはやくメガホンで情報を叫びながら廊下を走り去った。相変わらず今日も南九州に大規模な空襲があるらしい。引きつづいて空襲警報が鳴りだした。空を仰ぐと澄みきった朝空にちかちか目を射る高層雲が光り、どうやら敵機の来そうな気配がする。目にみえぬ音波がうす気味わるく、あとからあとからあちこちのサイレンがうなり出す。もうわかってるよ、そんな不吉な音はもう真っ平だと耳を押さえたくなくなるまでうなっては休み、うなっては休む。これは少なくとも勇気を振るいおこす音ではない。

さるすべりの花が真っ赤だ。夾竹桃の花も真っ赤だ。カンナはまったく血の色だ。病院の玄関を待機所にさだめられてある担架隊の医専一年生達が、この赤い花の陰の防空壕にひそんで、いざという時を待ちかまえている。

「一体全体、戦況はどうなんだろう」鹿児島中学から来たのがいう。

「俺が同級生もずいぶんたくさん予科練でいっとるばって」

「友軍機はどないしとるんやろ」大阪弁が壕のなかから聞こえる。「つまらへんな。こんなこっちゃ、なんぼう頑張ってもあかんで」

誰も返事をしない。この大阪の考えていることにうすうす気づいていないでもないのだが、しかし祖国日本はいま生死の関頭に立っているのではないか。戦争は勝つために始めたに違いない。まさか負けるつもりで政府が、こんな悲劇の幕を開けたのではなからう。しかしサイパン失陥いらい大本営発表の用語に、なにか臭い陰影を帯びていることが、敏感な学生にいつとはなく、ある不安を起こさせていたのは事実である。

「おい、級長、どう思う。この戦争はどうなる」大阪弁の男が壕のせまい口から赤い顔を

だした。ロイド眼鏡をかけている、なるほどこれは蛸壺だ。

級長藤本はさつきから青桐の下に腕組みをしたまま突っ立って、じいっと空をにらみつつけていた。小柄ながら肝のすわった男で、鉄兜から黒巻脚絆のきりりとした脚の先まで隙もない嚴重な身固め、これまで何回となく血の中から負傷者を担ぎだした体験は、よく級友の興望をあつめて、この小男が先頭きつてとびこむ煙の中へ、級友は一つの玉となって突っ込んだものだった。おやじの望遠鏡を持ちだして腰につけている。敵機が頭上に来るとそれをおもむろに取りだし、首をぐるぐる回しながら、敵機の行動を報告するのが、この男の趣味である。

「級長、どうなるんやろ、戦争は」大阪がしつこく繰り返した。

「戦争をどうするか——だ」藤本が押さえつけるようにいった。「戦争によって僕たちの運命が決められるんじゃない。僕たちによって戦争の運命が決められるんだ。僕たち相戦う若い者、アメリカの学生と日本の学生との力比べによって、勝利がどちらへ転ぶかが、決まるんだ」

「でもなあ、あんまりやないか、近頃のさまは、物量の差がひど過ぎるさかい、僕らのちっぽけな努力なんざあ、屁にもならん」

「そりやそうかもしれんたい。しかしだ。とにかくいまこの下の町へ爆弾が落ちたら、理屈も議論もなか。すぐ飛びだして行って、血止めをせにやらん。僕は最後まで僕の本分を尽くすばい」藤本が決然いい放った。大阪は納得しなかった。そこへ大きな角材をかついで副級長がやって来た。副級長は小倉中学出身で黙々と仕事をする男、いまでも監視壕の補強工事のため独りで汗を流しているのだった。

「敵がほんまにここへ上陸して来よったら、どないするん、おい、副級長」

「死生命あり」小倉の男は腰から扇子をとって汗をあおぐ。「生きるも死するも、人に笑われんごと」

ひっそりとなった。さるすべりも夾竹桃もカンナもよどんだ血のように動かない。その中を脈打つような蟬の声が向こうの山王神社の大楠から流れてくる。

この日は防空当番教官にあたっていた私が、病院の玄関から入って大廊下を裏門まで見回

る。どの病室の入口にも甲斐甲斐しく服装をととのえた看護婦、学生が身構えしている。

バケツは水でいっぱいだ。水道ホースも延びている。火叩き、鳶口、スコップ、鍬、いざといえば焼夷弾ぐらいはとばかり揃っている。入院患者は防空壕の中へ静かに運ばれてゆく。ラジウム室のまえで医専三年の上野君にあらう。この男はなかなか勇敢だ。この間の空襲で、婦人科から発火した時は隣の皮膚科の屋上に独りいて、監視の重任を果たしたのだった。私らが婦人科の炎にバケツをもって駆けつけた時、まだ敵機は続いて急降下爆撃をしていたが、上野はその弾の落ちてくる中で「おーい、敵機頭上通過、大丈夫、でて来い、燃えよっぞ」とか、「また来たぞ、落としたぞ、待避、危いぞ」とか、いちいち叫んで、指導した。

「がんばれよ」と私は礼を返しながらいった。上野は、はにかんで頭をかいた。

「このあいだは、お袋から叱られましたたい。人様の目につく事をして好か氣になるもんじゃなか。もう子供じゃなかけん……、と」

裏門には手押ポンプ隊がたむろしていた。すべては焼夷弾と爆弾とに対してはまずまず大

丈夫であつた。私は満足してこんどは病棟の東側を通つてみた。このあいだの爆弾にやられた外科、婦人科、耳鼻科のあとは、人の体の怪我よりもむごたらしかった。その傍らには、ここにもまた夾竹桃が血の色に咲いていて、ひっそりと石炭酸が匂っている。私はふっと不吉な予感を覚えた。

警報解除のサイレンが、身体じゅうの疑いを解いてくれるためにように鳴りわたった。教室へ帰つてくると、皆ががやがやいいながら鉄兜の紐をほどこところであつた。情報係の井上看護婦が、くりっとした眼をなおさるくるさせて、ちよつと小首を傾けながら「九州管内敵機なし」とラジオのいったとおりを報告した。赤らんだ頬に軽く汗が浮いて、髪の毛が三すじくつついている。

「ただちに授業始め！」本部伝令が、また叫んで通つた。学生はそれぞれ教室に入り、大講堂は再びひっそりした真理探求の象牙の塔となった。病院の臨床学科の方は患者が受付に押しよせて、予診をとる学生の白衣がその間を縫うて動いている。私の教室と廊下を隔てた向かい側の内科では、学長角尾教授の臨床講義の快い口調が扉からもれてきている。